日本の「カフェ」、西洋の「カフェ」── 人間関係の空間学 ──

呉　谷　充　利

序

われわれの生活には対照的なふたつの顔がある。酒宴の席とお茶の席である。ニーチェの言葉を借りれば、さしずめディオニソス的陶酔性に対するアポロ的明瞭性ということになろうが、われわれの生のリズムは小刻みにも大刻みにもこのふたつのあいだを揺れ続ける。お茶を飲んで意識が醒め、寝つかれず朝まで目が開いてしまったこと、アルコールを口にし、饒舌になってしまっている自分におぼろげに気付く。一度ならず誰しも経験することであろう。

こうした嗜好品は生存に栄養学的につながってゆくいわゆる「食」ではない。それらは何よりも人間の精神の問題に関わっている。現実のあるがままの肉体ー精神系に対する一種の改変がそこに起きている。こうした改変は一言でいえば、感覚系のデフォルメである。デフォルメされた感覚がこれらの嗜好品によって刺激され続ける。

われわれのフィクションとしての生は、そうした嗜好品によって一つには創られてきたのであり、それなくして人間の社会はあり得なかったのかもしれない。要するに、それらの特殊な液体、気体[1]はわれわれの文化と深く関わってきたのである。普遍的なロゴスを語る人間以前に生活を営むより根源的なこうした「人」の存在に目を向けなければならない。万華鏡のような彩りをもつ豊かな生の営みがそこにはある。

生は、これを支える世界と分かちがたくどこまでも絡まりあっている。それ自体で成り立つ生というものは無い。そうした生の表情は、これを成立せしめる無数の要因とともに、食ならば単なる食を、衣ならば単なる衣を、住ならば単なる住を越えるより全体的な視点においてこれを捉えてみなければならぬ。

そこにおける精神の意義を問うことにおいて、いわゆる文化として存在するわれわれの生活の一表情が明瞭にされよう。少し哲学的な言い回しになってしまったが、われわれの日常生活にもはや欠かせない嗜好品を空間論を交えながら、これをより深く人間関係の根本問題において捉え、われわれの今日的な文化の様相を明瞭にしてみたい。そこにおける

生活の真価を問うてみたいのである。

コーヒー

コーヒーの歴史は次のようなものである。コーヒーの原産地はアフリカであり、その樹の実の飲用の起源はアラビアにあるとされる。臼井隆一郎の『コーヒーが廻り、世界史が廻る』は、アラビアにはじまるこのコーヒーの歴史について詳しく述べている。それによればコーヒーの強い覚醒作用に気付いて、修業に取り入れたイスラムの一派があった。スーフィと呼ばれるイスラム神秘主義者は『「目覚めてあれ」「眠るな」「まどろみを追い払え」と歌う[2)]』。眠気をさますコーヒーの作用は、眠ることをタブーとするイスラム神秘主義のこの思想と結合するのである。

アラビア世界におけるコーヒーの歴史は「コーヒー」を考えるうえで重要な意味を含んでいる。コーヒーは単なる飲料としてではなくまさに人間の精神の意味として現われている。それは「理念のカフア（コーヒー）[3)]」として存在した。イスラム神秘主義、スーフィズムのコーヒーは、途中弾圧を受けながらも次第にアラビア世界全体に拡がっていく。記録によれば、ちょうど16世紀半ばのオスマン・トルコの時代、首都イスタンブールで最初のコーヒーの家ーkahvehaneーが 出現している。

スーフィズムにおけるコーヒーは、「コーヒーの家」というイスラムの社交の場となって、やがてヨーロッパに伝えられた。1652年ロンドン、1671年パリでそれぞれ最初の「カフェ」が誕生する。

が、ヨーロッパに入った「コーヒーの家」は違った結末を見せる。イギリスとフランスにおけるそれを比較して見てみよう。

イギリスの「コーヒーハウス」は、新たな人間関係を成立させる場となって、多くの情報交換や議論が交わされるようになる。臼井隆一郎によれば、「コーヒーハウスは、旧来の公私の関係を溶かし、新たな近代市民社会の公私の関係を鋳造していくかまどの役割を果たす[4)]」のである。

コーヒーハウスのそのような世界から、近代市民社会を支えるいくつかの制度が生まれている。近年の歴史を調べてみよう。

> 葡萄酒や船荷を扱う同業者が集まっていたロンドンのコーヒーハウスは、やがて「ロイズ海上保険会社」となる。コーヒーハウスには、新聞や雑誌が常備され、そこは重要な情報交換の場所となった。ロンドンのジャーナリズムは、コーヒーハウスと結ばれていた。文芸批評、証券、商品取引がそこに始まる。(『クロニック世界全史』講談社 1994による。)

臼井隆一郎の言葉を借りれば、『古典的な上流社会の社交場にはなかった身分制の枠を取り払った自由でデモクラティックなコンバーセーションによって近代市民社会の利害関係の衝突を最終的に収拾する審級としての「理性にもとづいた世論」を形成する能力』をコーヒーハウスは育んだのであるが、イギリスにおいてコーヒーハウスは次第に衰退する。イギリスは、この後、紅茶の国へと傾いてゆく。

この理由の一つとして、一説にはそれが家庭生活を疎んじて省りみない余りにも「男性社会」の産物となってしまい、女性がコーヒーに反対して陳情を起こすはめになって、その同意を得ることができなかったことによるともいわれ[5]、またインド、中国などの植民地支配による紅茶の栽培もこのコーヒーの不振を招くことになったとされる[6]。

これを乗り越えて見事なコーヒー文化を育てあげたのがフランスである。見てみよう。

> 1669年、ブルボン朝の太陽王ルイ十四世のもとに、オスマン・トルコより一人の使者が遣わされる。オスマン・トルコは当時「黄金の林檎」と呼ばれたウィーン包囲を目論む。使者、スレイマン・アヤの目的は、この挙に対するフランス・ブルボン朝の動向の偵察であったが、彼はこれに伴うもう一つの外交をフランスに残し、パリ上流社会にコーヒーを伝えた。(臼井隆一郎『コーヒーが廻り、世界史が廻る』による。中略)

スレイマン・アヤのコーヒーは女性を含む優雅な上流社会と深く結びついた。ところでこれとは別に1672年アルメニア人、パスカルは模擬的なコーヒーの店をサン＝ジェルマンに出す。が、このコーヒーの模擬店から「カフェ」への移行にはあるハードルがあった。模擬店にはじまる「カフェ」の試みはすぐには軌道に乗らなかった。

ハードルは立地条件にあった。「コーヒーの家」は単にコーヒーの出される場ではなかった。何よりもそこは人の集まる場であり、議論と情報交換の場であった。パリにおいてこの試みが成功するためには、「カフェ」の建てられる場所を考えねばならなかったのである。新しい「カフェ」は、コメディー・フランセーズの劇場の近くに陣取ることになった[7]。「カフェ」は、その夜の出し物が評され、議論に花咲く場となったことは想像に余りある。パリの市民生活とコーヒーは結びあったのである。「コーヒーの家」は、18世紀パリの精神性を担う生活のスタイルとなってゆく。このような「カフェ」の隆盛はフランス革命を準備する理性の審級の場としてやがて機能することになる。コーヒーはまさに近代市民社会の精神の液体として働くのである。

フランス近代は、「カフェ」に咲く。その先鞭を付けたカフェ『プロコープ』、フランス革命における『カフェ・ド・フォア』、印象派と『カフェ・ゲルボア』、実存主義とサン＝

ジェルマン＝デ＝プレ界隈の『カフェ』、フランスの近代を象徴するこれらの政治、芸術、思想の成立を見るとき、「カフェ」の果たした役割の大きさがわかろう。

銀座『カフェ・プランタン』

『日本全史（ジャパン・クロニック）』（講談社）によれば、日本における「カフェ」のはじまりは次のようなものである。

> 『可否茶館』が中国人鄭永慶によって明治22年（1889年）上野に開店する。わが国初のコーヒー店である。店内には、各種新聞や遊技具が備えられていた。この『可否茶館』からしばらくすると、西洋の「カフェ」に魅せられて、明治44年（1911）これを模した「カフェ」が銀座に作られる。パリの『カフェ・ガボン』をまねて、フランス帰りの画家松山省三が開いた『カフェ・プランタン』である。
>
> ところが肝心の「カフェ」は理解されず、やむなく彼はこれを会員性のクラブとし、この存続を謀った。会員にはこの時代を代表する文化人、知識人が名を連ねた。（『日本全史ジャパン・クロニック』講談社による。）

文化人、知識人を客とする日本版「カフェ」の誕生である。銀座にできたこの『カフェ・プランタン』をめぐる顛末は重要な意味をもっている。こうした明治末における日本の社会とコーヒーの出会いは西洋社会のそれとは違っている。西洋においてそれは近代市民社会の精神の液体ともいうべきものになる。コーヒーは、審級としての「理性にもとづいた世論」形成の原動力として働いた。『カフェ』は、市井の議場となった。

これに比較してみると、『カフェ・プランタン』は、西洋趣味すなわち形式的な西洋の模倣に留まった。「カフェ」の真の精神は日本の社会に浸透しなかった。それは何よりも近代市民社会における新たな人間関係の局面を開くものでなければならなかった。ところが日本的な旧来の人間関係はこれによって変えられることはなかったのである。

とすれば、日本版「カフェ」はいかなる意味をもって存在するのであろうか。このことを考えるとき、一つには、コーヒーに代わるもう一つの精神の液体が日本に存在したことを指摘しなければならない。お茶である。われわれは、そのようなコーヒー文化に対するもう一つの文化、茶の文化を築いてきた。

茶の精神

現在、茶の原産地は中国西南部雲南省であるとされる。茶の葉には身体の疲労感を取り

除く特別な効能があった。これに気付いた人々が茶の葉を煮てその汁を飲むことを憶えていく[8]。熊倉功夫の『茶の湯の歴史　千利休まで』（朝日選書）に従えば、茶に関する最も古い記録は紀元前59年王褒の書く『僮約』であり、そのなかに「茶を煮る」「茶を買う」という表現がある。こうした記録からみれば、茶はコーヒーよりもはるかに古い起源をもっている。

ところでコーヒーがイスラムのスーフィズムと結びついてその精神性を得たように、茶も単なる嗜好品を越え、その精神性を高める。そうした茶の精神性を説いた8世紀の書として、有名な陸羽の『茶経』がある。岡倉天真は、陸羽は万有を支配しているのと同じ調和と秩序を茶の湯に見たと『茶の本』に書いている。

わが国における茶の明瞭な記録として挙げられているのは、大僧都永忠が嵯峨天皇に献茶した『日本後紀』（弘仁六年、815年）の記事である[9]。当時の日本は遣唐使によって中国の進んだ文化をさかんに摂取していた。

このような時代のいわば中国趣味としての茶はいかにして日本に根を下ろしたのであろうか。茶はいかにして日本固有の文化へと花ひらいていったのであろうか。この精神文化の定着は日本固有の問題としてこれを見なければならぬ。

飛鳥時代西暦630年にはじまった遣唐使は、平安時代西暦894（寛平8）年廃止される。茶は中国に対する憧憬でもあったから、中国との関係が冷えれば、喫茶の習慣もこれと共に消えてゆくことはまた当然のなりゆきであった。

この後、おおよそ300年を経てふたたび茶が日本にもたらされる。中国に渡った栄西は、1191年帰朝し、臨済宗を広める。このとき彼は茶をもち帰った。熊倉功夫の説では、それは茶樹であったという。遣唐使廃止の894年から栄西 の帰朝する1191年まで、日本における茶の空白の歴史があったことになる[10]が、栄西によってふたたび中国宋代の茶風が日本にもたらされるのである。

栄西の茶は新しい形で日本に伝えられる。これを象徴するのが建保2年西暦1214年における時の將軍源実朝への茶の献上である。今日でいえば、「二日酔」の実朝に献じた一椀の茶が大いに功を奏した。このとき献上した『喫茶養生記』のなかで彼は養生の良薬として茶を紹介する。『喫茶養生記』は、日本人によって書かれた最初の茶書となった[11]。

茶は栄西によって日本に根づく一鍬を掘られた分けである。栄西がもち帰ったのは、宋代の抹茶であり、それは唐の時代の団茶（固形茶）に対していえば粉末茶であり「筅」（茶筅）をもちいて茶をたてる[12]。守屋毅の『喫茶の文明史』によれば、鎌倉時代初期にもたらされたこの抹茶が次第に拡がりを見せ、わが国固有の茶の湯の形成がはじまる。

わが国における茶の湯の形成において、重要な意味をもつのが茶会に変化する喫茶の形式である。茶会は、茶を社会的な人間関係の表現へと変えるのである。この茶会は今日われわれがイメージするものとは随分違っている。集まった人々は茶の味を飲みくらべてそ

の産地や銘柄を「賭け」た。これが「闘茶」と呼ばれるものである。したがって当然のことながら、そこには鉄火場の騒々しさがあった。

深い精神的意味をもつ「茶の湯」の成立は、この遊興的寄合からの脱皮をもってなされる。それが村田珠光によって創始される草庵の「わび茶」である。この闘茶と草庵のわび茶に対して、中間的なもう一つの茶の湯「書院の茶」が存在した。

芳賀幸四郎の『千利休』によれば、

『「書院の茶」は、折目正しく形式ばった極真の茶事で従来の茶寄合の猥雑性を払拭したその意味では洗練され純化された茶事である。また勝負本位で多分にギャンブル的な遊戯性や酒宴乱舞などをともなう官能的な享楽性を去り、心しずかに一椀の茶を味わいすぐれた芸術品を鑑賞し、世俗をこえて風雅の別天地に遊ぶことを意図したものであった。

書院の茶は、床の間、違い棚、付書院などが設けられ、畳をふだんに敷きつめ壁、襖、明障子などで区切られた座敷で行われた。[13]（後略）』

村田珠光はこの書院の茶と庶民的な喫茶の形式であった「下々の茶儀」を融合したとされる。彼は四畳半の茶室を作る。この四畳半の茶室は、茶の湯の形式において決定的な意味をもっている。なぜなら、これによる茶会の空間的縮小はそこに集まる人々の少人数化と限定を意味しており、そのことは別言すれば親密性と同時に逃避性、排他性を帰結するからである。

珠光没した後、わび茶は、16世紀前半「数寄」と呼ばれる町衆の茶の湯を生む。いわゆる「下京茶湯」である。珠光のわび茶は、京都の町衆のなかに根を張ってゆく。彼らは、市中に山里の情緒を求め、「市中の山居」としての小座敷を町家に造る。珠光のわび茶の「下京茶湯」への発展は、重要な意味をもつ。茶の湯が都市において社会的基盤を得、その生活の一端を担う。つまり、都市の人間関係を担う社交の根本的形式とその固有の精神が茶の湯を通じて生まれるのである。

下京茶湯は、さらに自由都市堺に伝わってゆく。珠光のわび茶は、堺より上洛して「下京茶湯」と連歌に学んだ武野紹鴎から千利休へと受け継がれ、大成される。

茶室の空間

こうしたわが国における茶の湯の完成において、筆者はふたつのことを明瞭にしたいのである。それは、まず闘茶から草庵のわび茶への展開に見る茶の湯の空間的意義であり、その空間がいわゆる裏、あるいは奥へと隔絶され、縮小、極小化されることである。同時に、そこが浮世から離れた遁世の場となったことである。茶の湯の深い精神的意味がここ

に現れる。

このような草庵のわび茶を空間的に表現するものこそ、茶室に他ならない。茶室には、露地がある。岡倉天心によれば、利休は露地の意味を次の歌に託している。

「私は見渡した　花はない　紅葉もない。浜辺に　小屋が一軒ひっそり立っている　秋の夕の　薄明の中に。[14)]」

露地は、俗世から物理的、精神的に茶室の世界を隔絶するための空間的・時間的仕掛けである。遁世の道というべきこの露地の歩みこそ、茶の湯の精神世界のはじまりである。この飛石を踏んでいくと躙口が俟つ。躙口をくぐる前に武士は、刀を捨てねばならない。

実は、身を屈めなければ入ることのできないこの躙口に対して將軍や大名の貴人口といわれるもう一つの入口があった。上下を区別するこのふたつの入口を珠光や利休は問わずに、躙口からみんな入れるようになったといわれている[15)]。茶室の中ではすべて同じ人なのである。躙口のかけがねが下ろされると、なかは四畳半の閉ざされた室内であり、外は見えない。座の距離はほとんどなく、天井は低い。

細部の意匠は、山里の草庵たる民家風の素材で作られる。自然のままの竹木の表情が大切にされている。こうした意匠の特徴的な表現をいえば、そこには何かくずされたかたちが存在する。絶対的な全体の秩序に従うことのない細部の結果としてのかたちのおもしろさがそこにはある。

堀口捨己は『草庭』のなかでこのような茶室の特徴的な意匠を反相称性として捉えている。同じことの繰り返しが忌避される「不同の理」をもって相称的な構成が避けられているのである。そのような「反相称性」を主題化してみると、茶室の造形には古代ギリシアに見る左右対称の美とはまったく異なる美的原理があることがわかる。

相称性は左右同形のことであるから、左右に対してある中心軸をもつ。相称を支えるこの中心軸の存在は、そこにおける形の空間的意味を示している。空間は、要するに左右、前後、高低で現される一つのひろがりである。つまり、この不動の軸の存在によってこれを軸にする左右への等質的ひろがりが現れる。結論づければ、相称の形は空間の水平的中心性を意味づける。

空間の水平的中心性を表現するこうした相称性こそ、西洋文明を成立させる重要なモメントである。西洋世界に見る広場のモニュメントはそこに生まれる。生活世界における一つの理念がそこに表現されるのである。西洋文明を象徴する広場は、普遍的理念を共有する人々の集まりの場となってゆく。この理念（理想）の普遍化を西洋文明は近代においてなし遂げる。

反相称性は、この中心軸をもたない。堀口捨己によれば、茶室において中心は常にずら

されている。西洋文明と真っ向から対立するような、こうした美的原理は空間的ひろがりではないもう一つ別の世界性を示していると考えられる。これが何であるのかといえば、それは一つの時間的経験ではなかろうか。

茶の湯とは優れて精神的な生活芸術であり、これを律するものこそ、そこに現れ出る時間性である。「パルテノンの美は建築の目で見ることで十分であるが、茶室の美は茶の湯の目で見なければならない」と堀口捨己は述べている。茶室の反相称性は、時間的な茶の湯の精神の現れとしてこれを見ることができよう。

西洋の造形的相称性に対する茶室の時間的反相称性は、視覚的な美的理念性に対する体験的な時間的情緒性としてこれを捉えてみることができる。この時間的体験において、まさに茶室における一系の心理劇が現れ出る。

西洋の「カフェ」、日本の「カフェ」

従来日本になかったテーブルと椅子が道に開放的につながったいわゆる「オープン・カフェ」が最近作られるようになった[16)]。こうしたスタイルの「カフェ」に対していうならば、日本の一般的な「カフェ」は閉鎖的で、「インクローズド・カフェ」ともいうべきものであり、そこは多くガラス窓をもって道と仕切られている。ガラス越しに通りを見ることはできても、そこには外部とのつながりを絶つガラスの壁がある。要するに、何らかの仕切りなり、壁なりで囲われた一つの部屋として日本の「カフェ」は存在する。椅子はテーブルを挟んで置かれ、そこは一組かあるいは一つのグループが顔を合わせる待合の場所となっている。

オープン・カフェはそのような形式を打ち破る。そこには「壁」は無い。その場は、都市の空間全体に開かれている。このようなスタイルのカフェは、パリに見られる。パリでは、カフェは道（歩道）に張りだしており、椅子はテーブルを挟んで置かれるのではなく、外に向かって並べられ、都市の外部空間に位置して、視線は外に向く。そこは、多く広場になっている。カフェはその広場の一画を占めている。広場には、教会やモニュメンタルな建物が立っている。つまり、「カフェ」ー「広場」ー「モニュメント」は一体の存在と考えるべきで、それは西洋文明の理念性とこれを築く西洋的人間関係のアレゴリーたる文化形式としてある。したがって、「カフェ」は単に液体としてのコーヒーの「家」ではない。それは、まさに人間関係の原理的意味において考察されるべき生活形式そのものの問題なのである。

西洋の「カフェ」がもつこのような精神性をわれわれは日本の「カフェ」に見い出すことはできない。実はこの問題である、考えてみなければならないのは。なにゆえ、カフェのそうした精神性は日本に根づかなかったのか。自由民権運動に象徴される日本近代の政

治的状況を考えれば、「カフェ」の精神を取り入れる社会的素地がなかったとはいえまい。

この点について、すすめてきた考察を以下にまとめてみたい。日本の「カフェ」は、空間的にいえば、壁に囲まれた一つの部屋として存在し、テーブルを挟んで椅子が置かれる。そこは、一組か一つのグループになって人々が向きあう場となっている。この特徴的な形式から洞察すれば、それは畢竟「茶室」に他ならぬ。そこには対面的な人間関係が存在する。

こうしたことを考えてみるとき、西洋の「カフェ」は日本の「茶」の文化にのみ込まれたのではあるまいか。「コーヒー」は「茶」に形式化されたように思われるのである。湯量も西洋のものに比べて多く、まさに茶である。コーヒーカップも西洋のものはもっと小さく、コーヒーの汁をすするように飲む。普通、コーヒーといって出されるのは「エスプレッソ」であり、それはとごり汁のようである。

要するに、「カフェ」は空間的にいえば「茶室」の如く、飲料として「お茶」のように変わっている。茶室に見るような対面的人間関係をわれわれは「カフェ」においてももち続けたのである。

そうした茶室的な囲われた空間における対面的人間関係に対していえば、モニュメントを臨む広場の「カフェ」には、理念（理想）を共有して集まるような人間的関係があろう。人の息づかい、微妙な心理的コミュニケーションをもってなされる日本の〔私ーあなた〕の無言劇に対するものは、西洋においては論理的理念性をもって結ばれる〔私ー彼〕の有言劇なのである。日本的人間関係と西洋的人間関係の根本的相違がここにあろう。

筆者は、カフェと茶の空間論をこの人間関係の根本的原理において考察してみたかったのである。われわれは、西洋思想を概念として理解しながらも、西洋思想の肉体ともいうべき人間関係の原理までは問うことなく、日本的人間関係の枠組みのなかでこれを思弁してきたといえよう。

そこには、頭（思想）と肉体（生活）の分離いわゆる精神と肉体に比せられる一つの乖離がある。この精神と肉体との文化的乖離こそが問題である。それは、今日の日本社会がかかえる問題に対して一つの病理をなしているように思われるのである。一言でいえば、原理的人間関係の混迷と破綻である。

この破綻を救済すべき新たな人間関係の構築、それは今日われわれに提出された根本的課題であろう。オープン・カフェにはいわゆる広場は無い。そこに立つモニュメントも無い。このことについて、深い洞察が必要である。異国の生活の形式的模倣を超え、それに独自の生命を与える文化の形式とこれを担う新たな人間関係の構築は、まさに生活の創造的摸索というべきものにはじまる。これこそ、村田珠光がなし遂げたものである。われわれは、「茶室」の形式的伝統を超え出る珠光の真の創造的精神を学ばねばならぬ時を迎えている。

注)

1) 気体の例として煙草がある。アメリカ・インディアンはこれを回し喫んで 、結衆の手段とした。(参考文献　熊倉功夫：茶の湯の歴史　朝日新聞社　1991)
2) 臼井隆一郎：コーヒーが廻り世界史が廻る　市民社会の黒い血液　中公新書　1994 p.20
3) 同書　p.23
4) 同書　p.60
5) 同書　pp.79-82
6) 渡辺淳：カフェ　ユニークな文化の場所　丸善ライブラリー 平7　p.35
7) 臼井隆一郎：コーヒーが廻り世界史が廻る　前掲書　p.101
8) 熊倉功夫：茶の湯の歴史　朝日新聞社 1991　p.19：茶の葉にはほかの葉にはない成分がある。(中略) こうした特別の成分に気づいた人々は、茶の葉の利用法を考えたにちがいない。(中略) それが茶の葉を煮てその汁を飲む方法であった。
9) 同書 pp.31-32
10) この点について、熊倉功夫は『茶の湯の歴史』のなかで、唐風文化への憧れが薄れた900年ごろから、再び栄西によって茶が紹介された1200年ごろまで の約300年間、(中略) この間少なくとも茶の嗜好品としての価値は失われた と述べている。(同書 pp.35-36)
11) 守屋毅：喫茶の文明史　淡交社　平4　pp.81-82
12) 同書　p.84
13) 芳賀幸四郎：千利休　吉川弘文館　平4　pp.47-48
14) 岡倉天心：茶の本　講談社学術文庫 1994　p.55
15) 桑田忠親：茶道の歴史　講談社学術文庫 1995　p.42
16) 日本経済新聞 (1995年7月29日付) は最近東京で目につくようになった「 オープンカフェ」を取りあげている。このなかで、この普及をさまたげているものに日本における「食品衛生法」と「道路交通法」の壁があるとしている。

    ちなみにパリの例でいえば、歩道の幅が1.6メートル以上ある場合パリ市はその一部を飲食店に貸し出し、カフェを側面から援助する。パリ市経済・財務局によると、賃貸料は歩道の三分の一までなら、一平方メートル当たりわずか49～396フラン (一フラン＝約77円) という。(同紙による。)

    こうしたことを比較してみると、より根本的な事柄として都市に対する市民意識の相違という重要な問題があることがわかる。

参考文献

臼井隆一郎：コーヒーが廻り、世界史が廻る　中公新書　1944
渡辺淳：カフェ　ユニークな文化の場所　丸善ライブラリー　平7
クロニック世界全史　講談社　1994
日本全史ジャパン・クロニック　講談社　1991
守屋毅：喫茶の文明史　淡交社　平4
熊倉功夫：茶の湯の歴史　朝日新聞社　1991
芳賀幸四郎：千利休　吉川弘文館　平4
桑田忠親：茶道の歴史　講談社学術文庫　1995
岡倉天心：茶の本　講談社学術文庫　1994
堀口捨己：『草庭』　筑摩書房　1971